

石黒宗磨

《失透釉茶碗》



石黒宗磨 (1893-1968)
《失透釉茶碗》

1935年
陶器
高さ8.8、径12.4cm
平成25年度購入

工

芸館のコレクションの中で、グラフィックデザインを除いてもっとも数多くの作品が収蔵されているのは石黒宗磨（一八九三―一九六八）です。石黒の熱烈な支援者・大屋幾久雄氏（故人、外科医）によるコレクション五十点があらたに加わったことにより、当館の石黒作品は約一六〇点となりました。大屋氏の旧蔵品には「春雪」や「夕映」という銘を持つ茶碗が含まれていますが、今回は《失透釉茶碗》をご紹介します。

《失透釉茶碗》は石黒による奥高麗タイプの茶碗です。奥高麗という朝鮮半島で作られた茶碗と思われるかもしれませんが、高麗茶碗の熊川や井戸に似せて桃山から江戸初期の日本で作られた唐津焼の茶碗を、古来茶人は「奥高麗」と呼んで珍重してきました。

石黒の《失透釉茶碗》は木灰分を含んだ長石釉がほんのりと青みを帯び、全体的に貫入が入っているのが特色ですが、ゆつたりと丸みを帯びて立ち上がる姿や、高台まわりには釉薬を掛けずにあえて素地の土を見せている点など、奥高麗を念頭に制作した作品であることは明らかです。

石黒による唐津作品としては、鉄絵で模様を描いた絵唐津タイプや、藁灰釉の釉調の変化が美しい斑唐津タイプについて目を奪われがちです。枯れた筆致で描か

れた味わい深い模様や絶妙な釉調に石黒らしい冴えが認められますが、そうした作品と見比べると、本作は模様もなく釉も単調で地味な作品といえます。しかし、本作は石黒のろくろ、つまり、土の仕事を考えさせる重要な作品です。

本作をおさめた箱には「昭和十年春於唐津」と記されており、一九三五（昭和十）年に石黒宗磨が唐津に約二カ月間滞在したときに制作した作品であることがわかります。

石黒にとって唐津での制作はきわめて印象深い体験だったようで、後年、「自分が陶芸家として鮮度をおとさずに今日にいたり得たとしたら、それは、唐津の土に骨身をくだいた、その土のおかげだった（中略）唐津やきは、禅坊主が枯れきって、坊主の臭みがとれて、百姓になったような人間になりさらないと、土が言うことをきいてくれないと言うことがやっとわかりかけて来た」（『唐津の魚』『禾盧園』）と回想しています。

唐津の土は砂っぽく、ろくろがなかなか思うようにいかないという性格があり、その結果としてザングリとした素朴な味わいのやきものが生まれるのですが、箱書に「於唐津」とわざわざ書き記しているのは、おそらく、この時の唐津の土との格闘の記憶をとどめるためではなかったかと思われます。（工芸課主任研究員 木田拓也）